

## 第9章 アメリカ大学教育のランキングと価格

丸山文裕

### はじめに

「アメリカにおける大学教育のランキングと価格」ということについて、お話したいと思います。昨年（1997年）の統計でアメリカには2年制、4年制、合わせて約3,700校の機関があります。そこでは大学教育の質と価格というものが、どういう関係になっているのかということについて調べました。大学選択というのは、“you get what you pay for”か“it pays to shop around”かどっちなんだと。これは私の言葉ではなくて、後からお話しますジェフリー・ギルモア（Jeffrey L. Gilmore）という人の論文の副題です。大学を選ぶ場合、お金さえ出せば大体教育の質がいいものが手に入るよ、または、もっといろいろ見回ることも大切ですよ、どっちが本当だろうかというのが、ギルモアの問題意識なのです。今日の話は、このギルモアの問題意識とまったく重複しております。

### 1. カレッジ・ランキングとは

カレッジ・ランキングについて、まずお話したいと思います。ヨーロッパのグルメたちがミシュランの星印の数でレストランを選ぶように、アメリカの大学進学者というのは、いろいろなランキングを目安にして大学を選ぶこともできるようです。それは大学評価の一つであって、大学進学者に対して情報提供をするわけです。これは、いろいろなものに載っています。The Change Magazineという、高等教育の専門雑誌がありますが、これにもしょっちゅう載っていますし、高等

教育専門新聞の *The Chronicle of Higher Education*, これにも週1回ぐらい、何らかのランキングが載っています。また、日本で言えば旺文社とか学習研究社の大学案内みたいなものですが、*Peterson's Guide To Four-Year College* もあります。もう一つ有名なのは、*Barron's Profile of American Colleges* というのがあります。これにもランキング一覧表とか、いろいろな項目についてランキングが載っています。それから *The Time Magazine*, タイム・マガジンですね。そして全国紙の *US Today* などにしばしば掲載されています。

その項目には、学生用には入学難易度があります。入学難易度についてはまた後ほどお話しします。他には合格率、授業料のランキング、卒業率のランキング、教員学生比、就職率、それからカレッジ・スポーツ、たとえばフットボールの1位はどこだとか、野球はどこが強いだとか、そうしたランキングがいろいろあります。これはどちらかという、学生が関心を持って見るランキングでしょう。教員用には教員業績数だとか、教員給与だとか、研究契約数、研究助成額、それから特許申請数。これは日本でもしばしば見ますが、日本の大学もだいぶ上位に入っているようです。それからノーベル賞授賞数。アメリカはノーベル賞の授賞者が多くて、私の昔の記憶では、累積のノーベル賞授賞者はMITが一番多くて、現役が Cal Tec (カリフォルニア工科大学) ではないかなと思います。多分、今でも変わっていないと思います。

たまたま、この研究会のために資料を準備しておりましたら、日本経済新聞夕刊(1998年3月3日)に「ランキングと格付け」というタイトルで、キッコーマンの社長がエッセーを書いておりました。なかなか面白くて、ちょっと読んでみますと、「アメリカ人は、人や組織やものを評価し、ランク付けをすることが好きだといわれている。評

価は格付けという形をとる場合もある。これらを、しよせん、バイアスのよせあつめと酷評する人もいるが、これらの中には、市場が適切な判断を下す場合に役立つものが多いと思われるし、評価される側はこれらを通して自分の実力を知ることができる。何らかのランキングをカバー・ストーリーでとり上げると、店頭での雑誌の売上げが25パーセントぐらい増えるといわれている。単行本についても、『ベスト・アンド・ワースト』とか、『トップ・テン』というような言葉の入ったものがよく売れる。」ということで、次の段の左側に、「その大学自体も評価の対象になる。ビジネス・スクール（経営大学院）やロー・スクール（法律大学院）などは、『USニューズ・アンド・ワールド・レポート』などによる評価に一喜一憂している。」ということでありまして、ランキングというのは本当に年中、どんな雑誌にでも出ているようです。

大きな大学のベスト120というランキングがあります。上から州立大学、やっと18位にニューヨーク・ユニバーシティ（New York University）が出ています。これが私立の最も大きな大学です。アメリカの場合は日本の場合と違って、州立、公立の方が規模が大きい傾向があるわけです。ちなみに、小さい方についてもランキングがあります。日経新聞の夕刊に最近、グレン・フクシマというアメリカ通商部の元代表の方のインタビュー記事が載っています。それによりますと、あの方は日系三世か四世で、大学に戦後間もなく進んだらしいです。高校時代優秀であって、スタンフォードとかいろいろ有名な大学に受かったらしいのです。しかし彼が行ったのは、ディープ・スプリング・2年制・カレッジ（Deep Spring Two-Year College）というところらしいのです。そこは学生数が20人だったと、インタビューに答えていました。教師が5人。大変難しい大学だと書いてありました。この資料を作る

時に、ディープ・スプリング・カレッジって本当にあるのか、今でもあるのかと思つて *Peterson's Guide* で調べてみましたら、確かにありました。トータル在学者数が20人。20人でも、やはり大学として世間で認められている。SATの上位1パーセント、超難関な大学と説明されています。グレン・フクシマさんがインタビューで、現在、日本人も1人いて、その日本人というのは、東大とハーバードを両方受かっていたけれども、二つとも蹴ってここに来ている。日本では考えられない小さな大学。かつ、無名な大学でも、非常に難しい大学がある。アメリカの高等教育機関の多様性を表しているかと思ひます。

次に御紹介するのはドクターズ・ディグリーの授与数のランキングです。これはやはり規模の関数ですが、私立大学がやはり出てくる。コロンビア・ユニバーシティーが4番目、それからスタンフォードが9番目。

それから、連邦政府助成額のランキング。学生向け奨学金を除いているようです。ですから、ほとんど研究助成といつていいですね。これは1番から5番まで私立です。しかし額だけ見るとこれらの私大はほとんど国立といつてもいいくらいです。ユニバーシティー・オブ・ワシントンとか、ユニバーシティー・オブ・ミシガン、ユニバーシティー・オブ・ウィスコンシン、これらは州立です。ユナイテッド・ステイツ・ミリタリー・アカデミー、これは国立です。エアフォースも国立です。このような順番で、私立大学がトップ・ファイブを占めています。

基本財産のランキングを見ますと、ハーバード、イエール、スタンフォードと、私立大学が多い。この中には規模の大きな州立大学が入っていません。ですから、規模とは無関係なのです。ただ、例外はユニバーシティー・オブ・テキサスです。こういう統計というか一覧表

を見て面白いなと思うのは、ユニバーシティー・オブ・カリフォルニア (University of California) ですね。これは6, 7校で構成されていて、それぞれ授業料が違うのです。しかし、こういった基本財産になると、かたまって統計が出てくる。その辺がどうしてこういう統計になるのかよく分からないのです。その他は全部、ユニバーシティー・オブ・カリフォルニア、バークレー (University of California, Berkley) というように個々に出て来るのです。

次に大学図書館の充実度のランキングもあります。これを見てもみると、お金と規模の関数といえます。図書館が充実しているのは基本財産が大きいから、または学生数が多いから、ということが分かります。ついでにアメリカ人がいかにランキングが好きかというのは、*Educational Rankings* という資料をご覧になるとお分かりになります。これは正に教育に関するランキングの本で、それには3,000ランキングが載っています。Faculty Publications, Library Facilities。ありとあらゆるものが載ってしまっていて、そのうち幾つかをピックアップしてみました。たとえば、"Best paid presidents at Research I and II universities for 1993-1994" という項目があり、学長の年間給与ですね。1番がボストン・ユニバーシティー (Boston University) の学長さんでジョン・シルバー (John Silber) という方らしいです。これは日本円にすると7,000万円ぐらいですね。やはりアメリカの学長さんは多いと思います。普通のプロフェッサーの給与を見てもみると、パブリックのドクトラルの機関、すなわち州立の研究大学へ行きますと、日本円にすると800万円ぐらいですから、こちらの方は多分、平均しますと日本とあまり変わらない。しかし学長さんだとか、私立大学のトップになると随分と支払われるようです。これはアメリカ社会の特徴で、トップに立つ人ほど給料が高い。そういう傾向が大学にも当

てはまるようです。以上がランキングの話題です。

## 2. ランキングの意味するもの

次に、ランキングは一体何を意味しているかということについてお話ししたいと思います。入学難易度とかSATスコアというのは大学の質を表す指標なのかということです。入学難易度のランキングではないのですが、*Peterson's Guide* に載っていた基準によれば、Most Difficult は“More than 75% of the freshmen”，新入生の75パーセント以上が、高校の時にクラスの上位10%に入っていた。さらにSATのスコアが、1,600点満点中1,250以上。ACT，これは36点満点中29点以上。かつ、応募者の30パーセントしか入学できない。これが Most Difficult の大学です。これに入るのはほとんど私立の大学です。SATはご承知のように最近名前が変わって、Scholastic Assessment Testといいます。昔は Scholastic Aptitude Test と言っていたのですが、2年くらい前に変わっているのです。多分、クリントン大統領が言ったように、来世紀にはアメリカ人の全員が大学に行く可能性があり、そうなると大学進学 of “aptitude” (適性) という言葉がもはや適切ではなくなってきたというのが関係あるかもしれません。

ところでランキングというのは、ほとんどインプットかアウトプットの指標です。SATスコアも、これは入学時の学生の能力を表しているわけで、大学教育の質の測定ではないわけです。大学教育の質を本当に測定しようとしたら、プロセスの情報が必要です。この一つの例として、A大学のほうが入学時の成績が高く、B大学が低いとします。しかし卒業時に何らかの形で測ったら、B大学の学生の方が高くなっていたというのであれば、B大学の方の質が高いといえます。かつ、こちらの方の授業料が高くても、納得がいくわけですね。なかなか

かそういう情報はない。しかし、さすがアメリカはいろいろなことを考えます。ACTというものがあります。ACTは何の略かと言いますと、American College Testing Service です。ETSが、これはSATを作っている元締めですけれども、付加価値テストを発売しました。付加価値テストというのは、入学時とそれから最初の2年間にどれだけ学力が向上したかをみるテストで、大学で使っているようです。ただ問題なのは、たとえばハーバードと他の大学を比べようと思っても、ハーバードの大学の学生というのはもともと学力が高いですから、これ以上高い得点を取れないという天井効果がある。その効果によって付加価値をどう評価していいか分からない。そういう問題がありますが、付加価値が大学の質を表すのではないかと思います。付加価値が比較的容易に測定できる例は、予備校です。予備校に入る前に学力が低くても、予備校の教師が一生懸命になって教育すれば、予備校生の学力が上がるという場合です。しかし現実には、こういった質の向上は起こり得るかという、なかなか起こり得ないと思うのです。有り得るケースとしては、こういう逆転現象ではなくて、差が開く方がたぶん多いのではないかと。

戦後、教育社会学の最大の発見というのは、School makes an able student abler, a poor poorer, すなわち学校というのは、人々を平等にするのではなくて、できる者をよりできるようにして、できない者をできなくする機関だということが、一つの発見だろうと思うのです。それは初等中等教育で言われていたのですが、これは大学でも言えるのではないかと思います。結局のところ起こっているのは、もともと学力の高い大学の学生の方が、その後の学力なり、好ましい価値や態度をより伸ばすことができる、ということになると思います。

### 3. 大学教育の質の測定

次に、大学教育の質の測定についてお話しします。学生への影響とか大学効果に対する関心というのは、今まで二つの研究分野が、主に行ってきたと思います。一つは、カレッジ・インパクト研究。これは、アメリカにおいてたいへん盛んであった時期があります。社会学者のバートン・クラークが1973年の論文で、「今後の高等教育研究で将来性のあるのはカレッジ・インパクト研究だ」ということを書いています。ただ、私の感想ではあまり盛んになっていないのではないかな。なぜかという、このカレッジ・インパクト研究をやっている人たちが主に心理学者なのです。心理学的研究で、あまり社会経済的変数を入れていないのです。この分野で言いますと、アスティン (Alexander W. Astin) という人がいるのですが、この人も元々は多分、心理学の教育を受けた研究者で、この人の研究でもあまり社会経済的変数を含んでいない。専らやっているのは、態度だとか価値観だとかパーソナリティ特性などが大学時代にどう変わっているかというのを測定する。授業料がどういうふうに学生の特性変化に影響するかとか、大学での変化が卒業後の賃金にどう影響するか、そういうことをほとんど問わない。研究自体はどんどん詳細になっていくが、経済や外部社会の問題をほとんど研究に入れない。

一方、そういうことを問う研究は、経済学的研究があります。人的資本理論やスクリーニング理論。たとえば、大卒は高卒よりも賃金が高い。それは大学で学んだ知識が生産性に反映されるからだという人的資本論。しかしスクリーニング理論というのは、またちょっと違って、大学というのは教育ではなくて選抜しているから、その効果が賃金に反映される、という二つの経済学的研究があります。しかし、非常に残念なのは、こういった経済学的研究は、学生が実際に大学で



のように変化しているのかというのを全く見ないのです。見ようともしないわけです。単に教育を年数で測って、その年数がどれだけ賃金に反映しているのか、ということをやっているわけです。最近はずすがに大学の質も、賃金に影響するという研究が表れていますが、初期の頃の研究というのは、大学教育の効果を、どんな大学か、どんな専攻か、どんな大学院かを問わないで、ほとんど年数だけで測っている。ですから両方とも欠陥があったわけです。この統合した研究が必要ではないかと、少なくとも私は思います。

#### 4. 大学教育の価格

次に大学教育の価格についてお話します。先程の *Educational Rankings* によりますと、授業料と施設費、寮費、食事代を含む、Board Charge、すべてを含んだお金がどこが一番高いかというと、サラ・ローレンス・カレッジ (Sarah Lawrence College) です。ニューヨークにある大学ですが、28,583ドル。これが全米で、一応 *Educational Rankings* によれば一番高い大学です。28,000ドルですから、日本円にすれば300万ちょっとになります。地方から東京の私立大学に下宿した場合はこれ以上かかりますから、日本に比べると安いでしょうね。これは授業料だけではなくて食事と寮費も含んでいます。300万円前後でカバーできるので日本よりたぶん安い。これが最高額です。

ただ、大学教育の価格は千差万別ですが、支払い方法がアメリカの場合、日本と比べますとユニークな方法がある。それについてもちょっとお話します。College Entrance Examination Board というところが出しております *College Costs & Financial Aid Handbook*, これも大学紹介雑誌ですが、そこに学力の高い学生に対する奨学金のリストが載せてあって、その次に芸術とか音楽の奨学金があって、今度は

スポーツの奨学金があります。日本ですとせいぜい野球とか、限られます。向こうへ行くと、アーチェリーからボーリング、ダイビング、アイスホッケー、ラクロス (Lacrosse) 等々があって、いろいろな種類のスポーツに奨学金を出すのです。

それから、これはいかにもアメリカらしいのですが、授業料のいろいろな支払い方法、猶予方法というのが書いてあります。成人学生に対しても何らかの割引があるようです。日本では考えられないのですが、卒業生の子供に対する割引があるのです。日本でこんなことをしたら情実入学。入学の時にも優遇されますから、二重の特権になる。アメリカはよく、自分の父親が行っていた大学に子供が行くということがあります。ロペスという人が20年ぐらい前に書いた『ハーバードの神話』という本の中に、本当のハーバディアン (Harvardian) というのは、三代続かないとハーバディアンと言わないと。日本でも江戸っ子は三代東京に住まないと言わないらしいですけど、そういうものだそうです。それから、シニア・シチズン (Senior citizens) お年寄りに対する割引。それからマイノリティー・スチューデント (Minority students) 割引。これもアメリカらしいのですが、"Family members enrolled simultaneously"。つまり親子、または夫婦、兄弟が同時に在籍した場合は、それ相当の割引がある。家族割引ですね。それから失業者に対する割引。そういうようなものもあります。以上が、アメリカの大学の授業料とその支払い方法についてです。

## 5. ランキングと価格

次は入学難易度とお金、授業料というのはどういう関係にあるかということについて、お話したいと思います。Peterson's Guidebook to

*Four-Year College* を見てみますと、授業料ランキングをグループ化した表があります。これは11段階に評価されています。2万ドル以上。もちろんこれは食事と部屋のお金も入っています。日本円にして240万円。年間に240万以上の大学が一番高い大学のリストです。それで入学難易度と授業料をいろいろピックアップして、関係を見てみました。そうしたら、入学難易度リストの *Most Difficult* に入っている大学は、授業料の方もほとんど最高のランクに入っていることが分かりました。たまに例外はありますが、それほどずれていない。入学難易度が高い大学ほど授業料が高い、という関係がある。とくに高難易度の高価な大学について言えます。ですから、アメリカの大学は学生が来るというならば授業料を上げてしまうという傾向がある、と推測されます。

面白いことに、このランキングは私立と州立大学の両方が入っています。州立大学だけを見てみますと、私はミシガン州で勉強したことがあるのでミシガン州の大学について多少知識があるものですから、ミシガン州について調べてみました。ミシガン州は中西部の大学で、東部に比べると伝統的に私立大学がそれほど多くなくて、州立大学が中心の大学形式をとっています。その中で一番難しい大学がユニバーシティー・オブ・ミシガン (*University of Michigan*)。これは州立大学でも、ユニバーシティー・オブ・ウィスコンシン (*University of Wisconsin*) と並んで、名門中の名門といわれている大学です。その次に私が勉強していたミシガン・ステイト (*Michigan State University*)。これが、ミシガン州では二番目に難しい大学といわれています。その次に、ウエスタン・ミシガン (*Western Michigan University*)、イースタン・ミシガン (*Eastern Michigan University*)、ノーザン・ミシガン (*Northern Michigan University*) という大学もあります。もう

一つ大規模大学として、ウェン・ステイト (Wayne State University)。これはデトロイトのダウンタウンの中にあつて、20年前は少し危ないようなところですが、そこに州立大学がある。難易度はそういう順番になっている。

これらの大学の授業料を調べてみますと、やはりこの順番です。ですから州立大学でも、入学難易度の高い大学ほど授業料が高い傾向があります。これはミシガン州だけでなく、カリフォルニア州でもいえます。ご承知の通りカリフォルニアでは、州立大学のトップランクはユニバーシティー・オブ・カリフォルニアの各校、例えば、アト・デイビス (at Davis) だとか、アト・バークレー (at Berkley) だとか、アト・ロサンゼルス (at Los Angeles) だとかあります。そういった大学が一番高い。その次に、カリフォルニア・ステイト・ユニバーシティー (California State University) の各大学ですね。あと、ステイト・ユニバーシティーよりも入りやすい州立大学があります。その授業料を調べてみても、そういった入学難易度のランクの順に授業料が並べられるわけです。カリフォルニア・ユニバーシティー・システムの中でも、各大学で微妙に違います。資料ではバークレーとロサンゼルスと、どちらが難しいかというのは判断できないのですが、授業料ではバークレーの方が高いみたいですね。同じシステム内でも、カリフォルニア大学の場合はいろいろ授業料を違えて設定しています。どうしてそういうふうになっているか分からない。また、州立大学内の微妙な格差というのは、どう制度化されているのかというのは、これもまだちょっと分からない。

ギルモアの研究は伝統的な難易度と評価だとか、資金量だとか、大学院の存在だとか、そういういったもので計った大学の質と、授業料がどう関係しているかというのを調べたのです。やはり彼も、大学の

質と価格が相関しているということを発見しています。また、学生に対する教育効果というものは、価格が高いほど大きいということも言っている。彼の分析で面白いなと思ったところは、ただそこで終わらなくて、次のようなことをやったわけです。基本的には大学の効果と価格とは相関するのですけれども、それから外れるグループがあるわけです。効果が高くて、価格が高いのは、グループ4と名づけ、効果が低くて価格も安い大学群をグループ1と名づけました。この二つのグループは、全体の分布に沿っている。しかし、それから外れている大学があるわけです。それらはグループ3とグループ2。グループ2というのは、授業料が低いのですが、いい教育をしているグループ。それから、逆にグループ3というのは、授業料が高くて、退学者が多いだとか、1年生の成績が悪いだとか、あまりいい教育をしていない大学群です。ギルモアはそれを見つけてきた。それは94校あって、グループ2の方は少ないのですけれど、64。これらの大学の特徴は何かということ、彼は調べているわけです。何が分かったかということ、Low cost, high performance 大学、つまりコスト・パフォーマンスに優れた大学は、基本財産が大きいんだと。資産運用によって経常収入が潤っているので、それを授業料に反映させ授業料を比較的安く設定している。逆に、グループ3のところは、基本財産が少ないので、結局、授業料に依存せざるを得ない。ですから結局のところ、基本財産が教育の質や効果と、授業料の関係に大きな意味を持つということです。このあたりが、今日の話の中心になります。

## 6. 奨学金と授業料

最後に、奨学金と授業料の関係についてです。質の高い大学の授業料が高いというのは大体分かったのですが、高い授業料を課している

大学は、奨学金をどういうふうな水準で学生に配分しているのかということ調べるのが大切だと思います。これもアメリカでいろいろ研究されています。ここで一つのキーワードは、「ロビンフッド・トランスファー」(Robin Hood Transfer)です。ロビンフッドというのは、昔読みましたけれども、金持ちからお金を巻き上げて、貧乏人に配るようなストーリーの主人公です。ロビンフッド・トランスファーは大学で一体起きているのか。つまり大学は取れる者から取って、奨学金という形で貧困な学生に再分配しているかどうかというのをいろいろ調べてみました。なかなか複雑で分かりませんが、手がかりにミシガン州の大学の授業料と奨学金の情報を見えます。奨学金には二種類あって、メリット・エイド (Merit aid) とニード・ベースト・エイド (Need-based aid)。メリット・エイドというのは、学力の高い学習優秀者に対して支払われる奨学金です。ニード・ベースト・エイドというのは、家庭の所得によって支払われる奨学金です。ニード・ベースト・エイドというのは、ほとんどが連邦政府の助成、奨学金です。ただ、ニード・ベースト・エイドには問題があります。というのは、ニードの定義が難しい。どういった学生がニード・ベースト・エイド対象者なのか。認定される一つの基準は、授業料と家庭所得の差をとります。そのエイド・ギャップがニードなのです。ですから、家庭所得の絶対水準が基準になっていないわけです。つまり中産階級、多少金持ちでも、授業料が高い大学へ行けばニード学生になってしまう。それはたとえばカラマズ・カレッジ (Kalamazoo College) といって、これは日本ではあまり知られていないのですが、ミシガン州ではお坊っちゃん大学として有名です。永井荷風が行った大学です。永井荷風が行ったリベラルアーツ・カレッジで、ここを卒業すると、ほとんど就職しないでロー・スクールとかメディカル・スクールだとか、

プロフェッショナル・スクールへ行くようなお坊ちゃん大学です。それで現在 Tuition and Fee が17,000ドルで、かなり高いわけです。そこには、トータル・フレッシュマンが338人います。そのうち、こんなに高いのに、ニードが必要だと認定される学生が206人もいるわけです。認定率は、61%です。たとえばユニバーシティー・オブ・ミシガンは州立で難しいのですけれども、州立ですから当然、カラマズ・カレッジに比べると授業料が州内居住者だと3分の1で済むわけです。5,000ドルですから3分の1以下で済みます。しかしそこでは授業料が低いにもかかわらず、5,149人のうち2,500人（49%）しかニード学生として認定されない。授業料が低いがために、家庭所得とのギャップが開かない。ですから半分ぐらいしかニード学生として認定されない。こういうところから推定しますと、「ロビンフッド・トランスファー」というのはなかなか起きにくい。アメリカの奨学金システムというのは、貧困層に対する機会均等よりも、中産階級あたりが一番得をするようなシステムになっているということが言えるわけです。

<参考文献>

- Astin, Alexander W., *Four Critical Years: Effects of College on Beliefs, Attitudes and Knowledge*, Joesey-Bass, 1977.
- Clotfelter, Charles T., *Buying the Best: Cost Escalation in Elite Higher Education*, Princeton University Press, 1996.
- Duffy, Elizabeth A. and Idana Goldberg, *Crafting a Class: College Admissions and Financial Aid, 1955-1994*, Princeton University Press, 1998.
- Gilmore, Jeffrey L. *Price and Quality in Higher Education*, U.S. Department of Education, 1991.